〔東京家政大学研究紀要　第27集，p. 97〜105，1987〕

障害児保育における父親参加について

鈴木　裕子*・金平　文二*・巷野　悟郎*
後藤嘉余子*・芝辻　益子**・上野己美子**

（昭和61年9月30日受理）

Participation of Father in Nursing of Handicapped Children

Yuuko Suzuki, Bunji Kanehira, Gorou Kouno,
Kayoko Goto, Masuko Shibatuji, and Kimiko Ueno

(Received September 30, 1986)

はじめに

発達上何らかの問題をもつ子どもの母親は，漠然とした育児不安のみならず様々な悩みや苦しみを抱え，諸々の問題への対応を迫られている．実際遅れのみられる子どもを介助し支持する役割を担うことは，不安と期待を合わせ持ちながら養育する状態にある[1]と言える．従って母親の負担は多く，当然ながらストレスも高くなりがちである．尤もストレスの内容は子どもの障害・年齢によって異なりはするが[2]，いずれにしても母親の安定をはかる上で，また子どもの養育においてマイナスの要因となっていくことは否めないであろう．このように考えると，障害をもつ子どもへの援助はもはや母親一人では担いきれず，地域社会の協力と援助が大いに必要であり，更には父親の参加が要請される．

母親の集団保育への参加は子ども並びに自己の問題を客観視し，適応の仕方を学び具体的な行動化の過程を援助する生産的役割をもつものであり[3][4]，近年注目されはじめた母子保育も子どもの発達の理解や親同志の学習の場として有効であることが指摘されている[5]．このように母親の集団参加は第3者との関わりをとおして認識や行為の変革を可能ならしめ，子どもの容認[6]や情報交換による不安感の解消に役立つと言える[7]．

一方，母親の社会参加に先立ち生活の基盤となる家庭での援助者としての父親は，集団参加の効果を高める上で重要な役割を担っている．一般に父親の生活や意識と母親の育児不安との関連については父親の積極的参加が評価され，協力的な態度や意識が母親の満足感を高め，安定した心理状態で子育てに臨める要因となるようである[8]．

また現代の父親は子どもと心理的距離をおかず，やさしくよき理解者であろうとする傾向がみられ[9][10]，職業・学歴・年齢などで，育児参加の程度や子ども観が影響を受けるという社会的存在としての父親像を強調した結果が報告されている[11]．さらに日常の具体的な接触に関し，加齢に伴う関わりの程度の減少や[12]協力度の低下[13]，「遊び相手」中心の育児行動[14]，低年齢児における父子交流時間の少なさ[15]などの指摘がなされている点にも留意しておきたい．

他方，障害児保育への父親参加については，母親を支える立場としての役割の大切さを示唆するにとどまるものが殆んどで，父親自身の直接的な関与に関わる検討はまだ十分とは言えない．しかしながら最近の生活環境や社会状況の変化を考慮すれば，父親の積極的な障害児保育への参加こそ，その効果が大いに期待される今日的課題ではなかろうか．

このような点を踏まえ，発達上の問題をもつ子どもの父親を対象に，家庭における関わり方と保育参加による意識・態度の変容を捉え，父一母一子一体となった障害児保育のあり方を追及しようとするものである．

方　法

東京家政大学わかくさグループ（障害児通所グループ）在室児9名（2歳〜4歳，男児4名，女児5名）の両親を対象に，家庭における父親の関わり方（12項目），子どもとの遊びの内容（14項目），家事参加（7項目），並びに，父親参観に関する意見・感想等をアンケートによって求めた．

＊児童学科・保育科
＊＊児童学科わかくさグループ

回答方法は父親には自己評価を，母親には母親からみた父親という点から評価してもらった．

更に父親参観を年3回（6月・10月・3月）実施し，保育場面への参加を通して父子交流の様子をビデオに録画した．

なお参観に際しては特に課題を設定せず，子どもと自由に遊ぶよう指示するに止めた．

参観後は保育者との懇談の場を設け，そこで話し合われた内容を全てテープレコーダーで録音し，資料として分析した．

結果と考察

1　子どもの特徴と父・母の関わり

個々のケースについて，子どもの特徴と父・母の関わり方の概略を示したのが表1である．

いずれも言葉の遅れを主訴とし，人への関心が稀薄で多動など，行動上の問題も合わせもっていることが理解される．実際始語期は健常児に比べて遅く，入室時には喃語状態から二語文を数語話すという子どもまで，その発達の程度は様々であった．加えて人への関わりを十分に体得していないことから行動面でも落ち着きがない，動き回る，といった状態が認められた．

生活習慣に関しても，母親の介助を必要とする場合が殆どであった．

同じ言葉の遅れを主訴としていても，その背景は一様でなく個別的な指導の重要性が示唆される．また在室期間は子どもによって異なるが，グループの活動を経験することで人との関わり，行動面，生活習慣，言語面にその子どもなりの成長・発達が認められる．

次に母親の関わりについてみると，MM・HMのケースのように自責感が先行していたり子どもの問題を明確に認識できなかった母親が多く，接し方がわからず戸惑っていた様子がうかがえる．しかしグループへの参加や同室の他児との比較によって，多くの場合問題を的確に把握し，子どもの成長が助長されるよう援助する姿勢が徐々に形成されている．

反面子どもへの関心が薄いMKなど，母親の意識や意欲が低下しているケースもみうけられる．このような場合には子どもに目立った変化が認められず，母親への情緒的な関わりも稀薄である．成長・発達が母子の相互作用に依拠するという点が大であることからしても，このような母親には現状の認識を促すと共に，子どもとの親和関係を確立するよう援助する必要があろう．

母親の社会参加ともいうべきグループへの参加は母親の精神的安定をはかると共に，子どもの問題・母親自身の問題を明確にし，遅滞の程度や歪みの状態の把握を助け実際的な関わり方について学習する場となる．このグループ活動を通して親自身の成長が促されてきたと考えられる．

他方父親の捉え方をみると，全体的に現象面での遅れや停滞については認識しているものの，問題の本質そのものの理解は不十分であると言える．

しかし，父親参観への出席状況を基に積極的参加と消極的参加に二分して関わり方を比較すると，MM・TS・HMに代表されるように，保育場面における観察や他児との比較によって，個々の子どもの発達上の問題をかなり的確にとらえている．しかも子どもへの関心が高く，自らも子どもの養育に関わろうとする姿勢が見受けられる．それはHMの個人面談の要請や，MM・TSの具体的なアドバイスを求める姿勢からも理解される．

このようなグループ参加における子どもの成長を認める反面，将来に対する不安感や見通しの不明確さに対する焦操感を抱いていることが，幼稚園への適応を心配するMMやTTの発達の停滞を危具する様子をとうしてうかがわれる．

これに対し消極的な父親には遅れを認めないHSや関心が薄いMKのように，子どもの捉え方の安易さや表面的な理解がみられる．成長・発達に関しても健常児との比較や標準的なレベルの到達という視点からの発想が強く，これが問題の把握をより困難にさせている一因となっているのであろう．発達上の遅れや歪みを呈する子どもの場合には，個々の子どもの発達に根ざした捉え方が必要であることからしても，決して好ましいとは言い難いと思われる．

さらに，父親の参加が積極的な場合は母親の接し方にも変容がみられ，意欲的に関わろうとする姿勢が助長されるように思われる．例えば子どもの行動を見守れるようになった（TS），前向きに受け止め援助していけるようになった（MM・HM）などは，それを如実に物語っていると言えよう．

発達上の問題をもつ子どもの母親は概して不安定になりやすく，父親の意識の高揚や意欲的な参加をより必要としている．父親の関わり方は直接養育に関与するとは限らないが，母親との関係（夫婦関係）や養育意欲に少

表1　子どもの特徴と父母の関わりかた

名前(性別)年齢	DQ	子どもの特徴	母親の関わり方	父親のとらえ方・希望等	その他
MM (♀) 4：2	82	新しい場面への緊張感が強い．言葉によるコミュニケーションが可能となって，対人関係も広がりをみせてきている．過度の慎重さが適応や運動面の発達に影響しているようである．	子どもへの自責感が強いが，次第に前向きの姿勢で子どもに接することができるようになってきた．いま，どう関わることが必要かを考え行動している．	動作は活発になってきたが，慎重すぎる面は変わっていない．幼稚園に入園した場合，他児と共に行動できるかどうか不安である．父親に話しかけたりまつわりつくことが多くなってきた．子どもへの接し方を知りたい．	幼稚園に入園予定． 父親参観　3回出席
TT (♀) 4：1	85	落ち着きがなく無意味な動きが多い．言葉は二語文程度で少々複雑なことになると，まだ理解できないところがみられる．	子どもの問題に対する関心が薄い．むしろ，兄の方へ目が向けられ本児への接し方が不充分である．母親自身，積極性や意欲に欠ける点が見受けられ養育態度にもそれが反映している．	兄と行動を共にしているせいか，好みも言葉も女の子という感じがしない．	幼稚園入園予定． 第3子出産予定． 父親参観　2回出席
AS (♀) 3：7	99	人との関わりが稀薄で，動きまわることが多い．言葉も理解に比べ発語が遅れている．しかし，徐々に目的的に行動するようになってきている．	子どもが順調に伸びていないことから禁止や規制が多い．しかしグループへの参加によって，子どもの成長を見守るようになった．	発語の遅れが心配である．他児との遊びもできるようになってほしい．	父親参観　1回出席
TS (♂) 3：4	52	母親以外の人との関係がもてず，単語が3～4語みられる程度である．身体発育も未熟で全体的に発達の遅れが認められる．	子どもの現状を客観的に捉えることは出来るものの，実際にどう接したらよいかわからず悩むことが多かった．現在は，本児のありのままの状態をみつめ関わろうと努力しているが，子どもとの行き違いが若干認められる．	個々の行動については変わった点もあるが，基本的には変化しているとはいえず，将来に不安が多い．参考になる情報が少ないので具体的なアドバイスが欲しい．現在子どもとは毎日散歩をすることで交流をはかるよう心がけている．	父親参観　1回出席
HM (♂) 3：4	78	無意味な動きが多く，目は合うものすぐそらせてしまう．相手をすれば応じるが自分から求めることはない．思い通りにならないとパニック状態になる．生活習慣は年齢相応に自立し，語彙量は増加の傾向にある．	健康上の理由から子どもの相手を充分に出来なかったことが負目になっており，苛立ちと自責の念で接しかたに波がある．以前より多少落ち着きがみられ，子どもの成長を援助しようと努めている．	多少言葉の理解は可能になってきたが，話せるようになるか心配である個人面談等の時間をとってほしい．	第2子保育園に通園 父親参観　3回出席
HS (♂) 3：2	94	母親への依存が強く，生活習慣の自立や対人行動面に遅れがみうけられる．	表情も硬く，一生懸命である反面余裕がない．こどもの成長に伴い硬さも薄らぎ，自分の接しかたを見直しながら，関わりを持てるようになってきた．	言葉が増え行動も積極的になり，健常児と変わらないので安心して接することができるようになった．しかし，母親への依存が強すぎて気の弱い男の子になるのではないかと心配している．子どもの成長を具体的に知らせてほしい．	父親参観　1回出席
MK (♀) 3：1	56	人や物への関心が薄く，言葉は話さず視線も合いにくい．しかし，時折求める身体接触に応じると多少喜びの表情がうかがわれる．	子どもへの関心が薄く，接しかたを考えることも少ない．最近では現状把握も若干出来るようになってきたが，具体的な関わりは依然少ない．	特に関心をもっていない．	加賀福祉園に入所手続き中． 第3子出産予定． 父親参観　出席なし
AN (♂) 2：10	81	母親に抱かれて通室する．全面的に依存している．他児・遊具に関心を示すが，行動が伴わない．生活習慣の自立や発語面の遅れが目立つ．	子どもの相手が苦手で，どうしてよいかわからないという有様であったしかし，グループでの活動をとうし発達の状態に合わせた対応の仕方や傍観しているだけでなく共に活動することの大切さを理解して接するようになってきている．	自分で歩くようにした結果，物事の理解はすすんだが躾が思うようにできない状態である．	父親参観　1回出席
MH (♀) 2：9	48	いろいろな物や人に関心を示し，感情表現も豊であるが，発語はほとんどなされない．全体的に遅れがみられる．	子どもの遅れを認め，出来るだけのことはしたいと積極的に取り組んでいる．集団活動に参加させ適度な刺激を与えて経験を豊かにし，発達を促すよう努力している．微細な変化にも子どもの成長を見出そうと意欲的である．	2歳後半になってもまだ発語がみられず，少々発達が遅れているのではないかと心配している．	父親参観　1回出席

DQは遠城寺式分析的発達検査結果

なからず影響を及ぼすものである．

子育てという点から考えるとき，父親の積極的な姿勢や発達状態の的確な把握は養育について母親との話し合いを深め，同時に精神的安定をはかり養育意欲を換起する役割を担っていることは明らかである．

2　保育参観を通しての父親の変容

表2は，父親の保育参観後の感想・意見・要望を，父親自身の問題，母親・子どもに対する捉え方，保育グループへの参加等の観点からまとめたものである．

参観前には積極的参加を望む父親はみられず，全員が気の重い状態にあった様子がうかがわれるが，参観後は活発に自己の考えを発言している．

まず父親自身の問題については，「どうしても健常児と比較してしまう．」「将来への不安がある．」「仕事を逃げ場にしている．」といった反省点があげられており，自分自身の変容をはかろうとする姿勢が見受けられる．

このような自らの姿を客観的にみつめた自己認識は，自分自身のあり方を問い直すきっかけとなり，従来とは異なる方向に志向していく可能性を多分に含んでいると考えられる．迷いや不安を持ちながら問題の解決をはかろうとする姿勢に，自己認識こそ正に態度の変容をもたらす動因となっていることが察せられる．

また，母親に関しては言動の消極性や子どもに対する過度の責任感を指摘し，「常に遅れているという強迫観念に追われている。」「人の何気ない言葉で傷つく。」という母親の心情を察した発言がなされている．

さらにおかれている厳しい現実をふまえ，家庭ではできるだけ明るくふるまうよう心がけ，心の負担を軽減しようとする配慮がみられる．

このような父親の姿勢は，母親が安定感をもつためには必要不可欠のものである．核家族化が進み育児上の相談相手も少なくなった今日では，母親にとって父親が大きな依り所となっていることは事実で，不安や悩みの多い母親の心情を理解した態度は母親の気持の安定に寄与し，ひいては子どもに意欲的に関わるよう間接的な働きかけをしていると思われる．

しかしながら「もっと子どもと一緒に遊ぶように。」とか，「二人で話していると悲観的になってしまう。」等の発言にも注目すべきであろう．これらは母親自身にも変容を求めていると言えるのではなかろうか．父親が自己を再認識したように，母親も子どもへの関わりや日常の態度について，認識を高めてほしいという願望の現われとも受け止められる．

父・母が共に自己変容をはかり問題を正視し，子どもの成長・発達を援助しようという姿勢で養育に臨む時，子どもにとっても望ましい環境が設定されることになるであろう．

次に子どもに対する捉え方をみてみよう．子どもとの接触は休日ぐらいとする父親が殆どで，他の兄弟や健常児との比較で特徴を把握し，「遊びや人との関わりが拡がった。」「多少，話せるようになった。」「迷子にならなくなった。」など，子どもの変化を具体的にあげている．さらに順調に発達を遂げない子どもに不安や疑問をもちながら，「短気になって，つい大きな声を出してしまう」といった感情的な対応をしてしまうようである．子どもの個々の成長をみていこうとする気持を抱きながら，無意識の中で健常児と同じような期待をしてしまうという柔盾が父親の行動に反映されており，個々の発達状態をとらえていくという視点の定着が早急に求められる．

その他，グループ活動等については父親参観の所期の目的を理解した受け止め方がなされ，集団の場での活動をとおし，子どもに関する情報を得ることが出来たとしてその意義を認めており，今後も継続的な実施を望む意見が出された．

以上，保育参観後の父親の変化を，父親自身の問題，対母親，子どもの捉え方という視点から検討してきたが，父親は母親と協力して問題解決にあたろうとする姿勢をもち，同時に父親としての自覚を高め，子どもを積極的に受け入れようとする意欲も十分に有することが明らかとなった．それらが具体的な行動として表出されるよういかに働きかけていくかが今後の課題であろう．

3　家庭における父親の参加度

一般に，幼児のいる家庭において父親が養育に関わる程度はそれ程高くないと言われているが[16]，本研究の場合にも略同様の傾向が見受けられる．子どもへの関わり・遊び・家事参加の各領域について，項目別に「よくする」を2点，「時々する」1点，「殆どしない」は0点として集計し，上位・下位それぞれ3位まで選んで表3に示した．全体的に日常生活面での子どもの関わりは比較的多いが，遊びや家事参加は少ないという結果が得られた．即ち，食事・入浴など限られた生活時間内で父と子が共有出来る場面の参加はかなりみられるものの，純

表2　保育参観後の父親のとらえかた

グループ活動

グループの意義
・親自身が変わりつつあると思う．
・先生方のアドバイスがないとマイナス方向に意識がいってしまう．

参観の意義
・先生方のこどもの接しかたが参考になった．
・子どもの成長の様子がわかる　(3)

父親について

心情
・比較する必要は無いと言われても比較せざるを得ない　(2)
・このまま3歳になってほしくない．
・育てかたの良い悪いではなく結果としてこうなったので誰の責任でもない．
・何かしなくてはと思うがどうして良いかわからない．
・仕事という逃げ道に月～金曜日まで逃げている．
・これで良いのかと思ったり，大丈夫だと思ったり割り切れない．
・子どものことを真正面から真剣に考えることを避け逃げている．
・子どもにすることは良いと信じ，効き目があると信じないとつらい．

変化
・仕事に逃げず仕事も子どもも大事に思うように変わった．
・今までと考えかたを変えて，仕事のやり方や中味を変えてきた．

子どもについて

子どもの特徴
・健常児に比べて遊び方が下手．
・兄と同じことをいつもしている．
・姉がいるので兄弟のいない子と違うように思う．
・兄と一緒で女の子という感じがしない．

子どもの変化
・遊びが偏っていたが他に拡がりつつある．
・今までは何でも無視していたが，1つ1つ判るようになってきた．
・出来なかったことが出来るようになった．
・迷子にならなくなった．
・子ども同士の関わりがみられるようになった．
・子ども達が成長してきていると思う．
・話すようになった．
・遊びかたが僅かではあるが進歩したと思う．

母親について

母親の特徴
・他の子どもより遅れていることが負目になっている．
・考えかた・行動が消極的　(3)
・じぶんで殻にこもってしまう．
・人の何気ない言葉でもズキンと胸にくる．
・不安定な心理状態だと思う．
・父親はしょうがないと思うことも母親にはこたえる．
・遅れているという強迫観念に常に追いかけられている．
・子どもに対する責任を非常に感じている　(2)
・目標を持っても追いつききれない現実は厳しいと思う．
・辛いだろうと思う．
・口が重たいせいか会話が少ない．

子どもとの接触
・平日は無関心で土・日曜日のみ接する．
・日曜日位であとは1～2時間．
・休みの日しか相手になれない　(3)
・忙しくて構ってやれない．

子どもとの接しかた
・遊びかたが下手．
・短期になってしまう．
・つい大きい声を出してしまう　(2)
・今は子どものペースで毎日散歩をしている．

こどもへの不安や迷い
・臆病で慎重過ぎる　(3)
・幼稚園に入れるかどうか．
・子どもの問題点が好転しない．

母親への配慮
・出来るだけ明るくして，2人で落ち込まないようにしている．
・子どもの問題が母親の責任だとは思わない．
・母親に文句を言わない．
・同じ立場に立たず，別の視点で考えるようにしている　(2)

母親への注文
・女の人も変わってほしい．
・子どもと一緒に遊んでほしい．

母親との対話
・2人で話していると悲観的になってしまう．

育てかた
・出来ることもやらせずにいた．
・何でも親がやっていたことを子どもにやらせるようになった．

父－母の差
・母親に出来て父親に出来ないことはない．

親の役割
・子どもの心理状態をどれ位みられるかが大事だと思う．

表－3　領域別にみた父親の参加度

	子どもとの関わり		子どもとの遊び		家事参加	
	項　目	得点	項　目	得点	項　目	得点
参加度の高い順位	1.食事	1.78	1.ふざけっこ	1.11	1.子どもの世話	1.11
	2.入浴	1.67	2.絵本よみ	1.00	2.掃除	0.78
	3.買物・対話遊び相手	1.22	3.ぐるぐるまわし	0.89	3.買物	0.78
参加度の低い順位	1.添い寝	0.55	1.ままごと	0	1.洗濯	0
	2.手顔を洗う	0.55	2.電車ごっこ	0.11	2.食事の支度	0.33
	3.外出	0.66	3.かくれんぼ	0.22	3.ゴミ捨て	0.56
平　均	1.03		0.68		0.63	

然たる家事労働である洗濯や食事の仕度に対しては非常に消極的であると言える．このような状態の中で，母親への援助に直結する子どもとの遊びが身体接触を伴って時々行なわれている点は興味深く，対象児の発達的特質を考え併せると，不十分ながらも現状では評価してよいのではないかと思われる．

次に保育場面への参加度との関連をみるために個別に得点を算出し，父親参観の参加回数を基に，２回以上の積極参加群と，０，１回の消極的参加群に二分し両者の比較を行った．（表４）その結果遊びの領域で積極群が消極群を上回り，前者の方がより子どもと遊んでいることが明らかとなった．即ち積極群の父親は子どもとの接触が多く，それが子どもの理解を深めていくものと考えられる．前述の子どもの把握における両群の違いもこのようなところに誘因があるのではなかろうか．また父母間の評価点差に着目すると，いずれの領域でも父親の過大評価がみられ，特に子どもとの遊びには両評価点間に有意な差が認められた．つまり，父親が参加を自認している程母親は評価せず，殊に子どもとの遊びにその傾向がより顕著に表われたことは注目に値する．父母の評価のいずれが妥当であるかは容易に判断できないが，両者間に差が生じた事実は父親の認識と母親の要求水準にズレが認められるということであり，その根底には父―母の関係に何らかの問題が介在しているであろうと推察される．夫婦関係は子どもの発達を促進あるいは阻止する遠因ともなり，家庭内での状況を理解する上で重要な要因であると考えられる．子どもの場合と同様に，父母の関わりにもまた様々な問題が指摘されよう．そこで父―母間の評定差に着目し，事例を通して考察をすすめてみよう．

事例Ｉ　父親の自己評価が母親の評価を上回るケース（MMの場合）

子どもの変化：　身体発育も未熟で，全般的に遅れがみられたが，周囲からの刺激を受け，わづかづつではあるが伸びてきている．母親とも離れて遊んだり，一人でやろうとする意欲も認められるようになった．しかし微細運動・発語面の遅れは依然として大きい．

子どもと父・母との関係：　母親を基地として新しい事を試みている段階で，母親もよくそれに対応している．しかし，何かと手をかけることも多い．父親にもよくなついており，親しみをもっている．母親の父親に対する

表４　家庭における父親の参加度

	子どもへの関わり(0~24)			子どもとの遊び(0~28)			家事参加(0～14)			計		
対象児	F	M	差異	F	M	差異	F	M	差異	F	M	差異
M・M	17	13	4	12	8	4	8	4	4	37	25	12
T・T	8	10	－2	10	6	4	3	4	－1	21	20	1
A・S	14	12	2	6	10	－4	5	4	1	25	26	－1
T・S	12	10	2	11	7	4	5	3	2	28	20	8
H・M	10	10	0	6	5	1	2	4	－2	18	19	－1
H・S	13	13	0	10	4	6	5	4	1	28	21	7
M・K	6	9	－3	3	6	－3	1	2	－1	10	17	－7
A・N	16	16	0	13	8	5	6	6	0	35	30	5
M・H	14	6	8	6	2	4	3	0	3	23	8	15
平均	12.22	11.00	1.22	9.67	6.22	3.45*	4.22	3.44	0.78	23.89	20.67	3.22
積極群	12.00	11.20	0.80	9.80	6.00	2.20	4.60	3.80	0.80	26.40	21.00	4.60
消極群	12.50	10.75	1.75	7.00	6.50	0.50	3.75	3.00	0.75	23.25	20.25	3.00

注：(　)は取得点範囲　＊Ｐ＜,05

要求は高く，子どもの様子はよく聞くが実際の接し方は求めに応ずる程度であると感じている．もっと自分から相手をしてほしいと感じている．

参観時の様子：　初めは戸惑ったようであったが，時間の経過に従い子どもの動きをよくみて相手になっている．子どもを気軽に抱き上げたり，運動的な遊びをよくするなど，よく対応していると思われる．

母親の父親評価が低い典型的なケースと言える．当然ながら両者の得点差は大である．保育参観時の関わり方などから推察すると，父親の評価がより妥当で，母親の要求水準の高さがうかがわれる．

これは行動的・積極的な母親が，自らの行動と同様の関わりを父親にも求めているものであり，それぞれの役割を認識し，過剰な期待をかけることがなくなったとき父親の行動も客観的に捉えられるようになるであろう．しかし，子どもの成長を出来る限り助長しようとする姿勢が感じ取れる点は注目したい．

事例２　父親の自己評価が低いケース（MKの場合）

子どもの変化：　基本的生活習慣の確立や発語面においては，６カ月経った現時点でもあまり変化がみられない．しかし身体接触などをとうして，自分から関わりを求めることが多くなり，対人関係や理解面での伸びが認められる．多動傾向もやや減少し，次第に集団行動がとれるようになってきた．

子どもと父・母との関係：　排泄・着脱などの介助が必要な時以外は母親を求めることが少なく，むしろ父親との接触を好む．母親も積極的に子どもの相手をすることが少なく，母子関係は稀薄のように見受けられる．

母親は父親の関わり方に十分満足しており，積極的に子どもの相手をし，家庭内の事柄にもよく協力してくれると思っている．また子どもも父親に対し親しみをもっているととらえている．

参観時の様子：　参加する意志は多少あるようだが，仕事を理由に全く出席せず．

子どもとの関わり・遊び・家事参加のいずれにおいても父親に対する母親の評価が高い唯一のケースである．しかも評価点差は極めて大きい．母親は父親の援助や子どもへの関わりを好意的に受け止め，現状に十分満足している．しかしながら，表１，表４を見る限り，父親は保育参観には全く参加せず，子どもや家庭のことにもあまり関心を示さない様子がうかがわれ，母親の過大評価が看取出来る．満足感もなくてはならないが，適切な判断基準をもつことが大切で，何よりも母親自身が子どもの問題を十分理解し，傍観者としてではなく自ら考え行動する必要がある．それが子どもの変容を促す一つの要因となり，ひいては父親の認識を高める結果をもたらすと考えられる．

事例３　評価点差の少ないケース

ｉ）TTの場合

子どもの変化：　入室時は落着かず，人との関わりももとうとしなかったが，興味をもっている遊具による活動や，セラピストの働きかけをとおして行動・対人関係面での成長が認められ，集団生活も楽しむようになった．現在，発語面での発達は目立つものの理解面がやや停滞している．

子どもと父・母の関係：　時折母親に甘えるが，他の人で代用することもある．家庭でも母親の存在をそれほど必要としていない．母親は父親に気を使いながら，どちらかというと服従的である．休みの日など父親は子どもを連れて遊びに行くものの，兄に焦点をあてた遊び方をする．子どものことについては母親の口が重いこともあり，あまり話をしない．但し父親に対して子どもは親しみを感じているようである．

参観の様子：　積極的に相手をするより子どもの様子をながめているということが多い．兄が同室していた為か，子ども同志にまかせているという感じであった．

ii）HMの場合

子どもの変化：　多動であり，言葉も喃語程度で，人との関係が稀薄であった．母親より父親に愛着を感じ，母親を無視することも多かったが，徐々に母親にも親しみを感じるようになり必要とするようになってきた．まだ多動傾向がみられ，発語の遅れも認められるものの徐々に伸びていきつつある．

子どもと父・母の関係：　母親を試すように顔色をうかがいながら行動する．母親との信頼関係も試行錯誤しながら徐々に確立されてきている．父親には多大な信頼をおいており，後追いして泣くほどであった．母親は，子どもが父親に対して母親以上の親しみをもっていることを認めている．従って父親は，両者の間にたってクッ

ションとしての役割を果たそうとしており，行き違いが生じやすい関係がスムーズにいくよう援助している．父と母のコミュニケーションはよくとれており，子どものことについて父親の考え方などを随時話し合いながら養育にあたっている．

参観時の様子：　適切なタイミングで遊びの介助をしたり活動の展開をはかるなど，子どもとの関わりにかなり慣れている様子がうかがえる．時には見守り，あるいは援助したり，また働きかけたりといった子どもの活動のペースに合わせた動きがとれている．

いずれも父母間の評価点が近似しているケースであるが，家族関係や子どもの問題にはかなりの相違が認められる．TTの場合には，母親の無気力，父親への服従，兄を中心とした家庭生活といった状況の下で，本児自身の緩慢な発達が問題をより大きくしている．父―母の対話も母の口が重いこともあって十分ではない．保育参観時の様子をみると積極的にかかわっているとは言い難く，父親の意欲を換起するためには母親自身が主体的・態動的に働きかける必要があるように思われる．子どもの発達にとっても，好ましい夫婦関係の確立にも母親の変容が是非とも望まれる．一方，HM児は母親の努力で母子関係がかなり好転して来たものの，依然として発達上の問題は大きく父親の関与を必要としている．父母で協力しながら問題解決にあたろうとする姿勢が随所にうかがわれ，子どもの養育についての話し合いもよくなされている．父親の実際面でのかかわりはグループ全体の平均にやや及ばないが，精神的な協力度は大いに評価できるものがある．保育場面においても父親は子どもに合わせた適切な対応をしており，家族が子どもを核に共同体として結びつき，強力な協力体制をとっていることが察せられる．

以上の事例を通して評価差にみられる特徴をあげるならば，父＞母の場合には母親の客観性の欠如と期待の稀薄さがうかがわれ，父＜母では母親の要求水準の高さが指適できる．また近似的な評価差を示していても，母親の無気力から父親の参加が低下したり，反対に協力し合い意志の疎通をはかることで評価差が少なくなる場合も見受けられた．

このように夫婦の関係をはじめとして，子どもをとりまく家族の状況は様々である．父親参観やアンケート調子どもの成長・発達をめざすよりよい方向を見い出せるよう援助することも必要であろう．

おわりに

障害児保育における父親参加の必要性という観点から，家庭内で父親がどのように養育に関わっているかその程度を把握し，さらに父親参観といった実際の保育場面への参加をとおして父親の考え方の変容を捉えるよう考察をすすめてきた．その結果，家庭での父親は子どもと日常生活面でかなり関わりをもっているように見受けられるが，その参加度の評価には父母間に差異がみられ，特に子どもとの遊びに関して母親の過少評価が認められた．

また保育参観後の父親の考え方や意見などから，母親を積極的に援助する必要性，協力しようとする姿勢が強化され，子どもの現状を受けとめた接し方をはかろうと努力している様子がうかがえる．つまり父親としての自覚を高めたと言えよう．

親の態度の変容が子どもの成長を助成する原動力となることは言うまでもない．直接養育にあたる母親の不安や悩みを柔らげ，安定した気持で養育に携われるようになる為には何よりも父親の理解と協力が必要であろう．父親・母親がそれぞれの役割のもとに協力して問題解決にあたる時，そこにより効果的な保育が展開されるものと期待できる．それには個々の家庭状況を考慮しながら，保育という実践の場を提供し，スタッフとの話し合いを繰り返す中で体験的に学習してもらうことがより有効であろう．

しかしながら一方では，保育参観の実施によって障害の認知がなされるようになってきたものの，問題解決にあたっての具体的な方法論や限界を感じている父親に，どのような対応をするかという問題が新たに提起されてきた．

障害の除去にのみ目を奪われず，子どもの将来を考えて養育にあたるよう，いかに援助するかが今後に残された課題である．

本研究は，昭和60年度厚生省心身障害研究，母子相互作用の臨床応用に関する研究の一部である．

引用文献

1) 有馬道久・山本多喜司・石井眞治・井上弥・谷本患明：障害児および健常児の母親のもつ養育上の役割に関する研究　日本教育心理学会第25回総会発表論文集　pp. 222〜223

2) 植材勝彦・新美明夫：心身障害児をもつ母親のストレス　日本教育心理学会第25回総会発表論文集　pp. 760〜761

3) 奥平洋子・宮地文子：発達遅退児の援助過程について(1)　日本保育学会第37回大会研究論文集　pp. 492〜493

4) 宮地文子・奥平洋子：発達遅滞児の援助過程について(2)　日本保育学会第37回大会研究論文集　pp. 494〜495

5) 秋場美智子：障害児をもつ家族への援助　日本保育学会第38回大会研究論文集　pp. 382〜383

6) 平野尚子：第三者とのかかわりにおける母子関係の変化　日本保育学会第34回大会研究論文集　pp. 328〜329

7) 和田薫：障害児保育に関する研究　日本保育学会第37回大会研究論文集　pp. 482〜483

8) 牧野カツコ・中西雪夫：乳幼児をもつ母親の育児不安　家庭教育研究所紀要6　pp. 11〜24

9) 窪龍子・青柳幸子・高野陽：父親の育児に関する認識と実践について(3)　第30回日本小児保健学会講演集 pp. 152〜153

10) 窪龍子・青柳幸子・高野陽：父親の育児に関する認識と実践について(2)　第29回日本小児保健学会講演集　pp. 92〜93

11) 窪龍子・青柳幸子・高野陽：父親の育児に対する認識と実践について　第28回日本小児保健学会講演集　pp. 114〜115

12) 竹内和子・上原明子・鈴木博子：父親の育児意識に関する一考察　日本教育心理学会第24回総会発表論文集　pp. 302〜303

13) 藤田萬里子：乳幼児のいる家庭における父親の育児家事行動　第32回日本小児保健学会講演集　pp. 384〜385

14) 天富美禰子・神坂勝美：1，2歳児のいる家庭における父親の育児行動について　第31回日本小児保健学会講演集　p. 11

15) 佐野良五郎：父子交流に関する調査　第31回日本小児保健学会講演集　p. 12